追悼　寿岳章子さん

志を貫いた、寿岳さん

—研究と実践を見事に一致させながら—

遠藤　織枝

1．最後のお見舞い

寿岳章子さんは、３年前から入退院を繰り返していた。京都や、神戸・大阪で学会があるとそれにかこつけて、お見舞いはしていた。でも、せいぜい年に２、３度だった。もっと行っておけばよかったと、つくづく後悔している。まだまだお見舞いの機会はあるはずだし、元気になって、夏のワークショップにも出て来られるだろうからという、根拠のない甘い希望的観測をしていたことが間違いの元だった。

今年５月30日の甲南大学での日本語学会のときも、学会へは顔を出した程度で早々に切り上げて、向日市の病院に向かった。いつも、食べ物をどうするか、カロリーの低い、しかも、グルメの寿岳さんに満足していただけるお弁当を選ぶのが一大問題だったが、今回はまったく違った。食欲がないから、ほんの少し果物でもという、いつもお世話してくださっている田中さんのお話で、季節の果物の盛り合わせを持って行ったのだが、全く食が細くなってほとんど、口をしめらす

程度しか食物は摂れないようだった。あまりの変わりようにひどく衝撃を受けた。ほっそりと顔も小さくなり、肌が白く透けるようで、話し声もか細く力なげだった。あの、にこやかでふくよかな寿岳さん、いつも、おいしそうに、うれしそうに、持って行くものをなんでも喜んで食べてくださった寿岳さんはどこへ行ってしまったのか。あわてたし、狼狽した。

それでも、そのうちにまたいつもの食欲が出て、回復していただけると信じていた。一緒に見舞った、佐竹秀雄・久仁子ご夫妻からわたしはお二人の最新の著作をいただいていた。謙虚なお二人にはその本を寿岳さんにお見せするそぶりもないので、わたしが30分ほど前にいただいたばかりの本を取り出して、「佐竹さんお二人が今度こういう本をお出しになったんですよ」と、お節介ながら、その本を寿岳さんの手に渡した。寿岳さんはその本をうれしそうに眺め、教え子である著者の名前を指でなでていた。小さい声で「よかったな」と言われたように思う。

もうひとつお節介なことを言った。2004年にアメリカの言語学者が編集し、Oxford大学出版社から出た*Japanese Language, Gender, and Ideology CULTURAL MODELS AND REAL PEOPLE* に、寿岳さんの『日本語と女』がたくさん引用されているので、「お名前が英語の論文にもたくさん出ているんですよ」と、報告した。寿岳さんは微笑みながら黙って聞いていたが、佐竹さんの本のようなうれしそうな反応はなかった。英語の本というのが実物がないままに、具体的なイメージが浮かばなかったのかもしれない。この本を持って来なかったのを悔いた。

付き添いの方が、寿岳さんが食べたいという希望で買って来られた、ハーゲンダッツのアイスクリームもほんの少しを２口食べただけで、もういいと手を振り、本当にめんどくさそうで、しんどそうだった。「また、歩けるようになってくださいね、そのためのリハビリもお願いしますよ、次はお家の方へ伺いますからね」と、こちらの言いたいことだけを言って、おいとました。その間、寿岳さんは、うなづいたり、手を動かしたりはしていたが、自分から話すことは佐竹さんの本のとき以外にはなかった。もう何もかも億劫だったのかもしれない。

こうして、１時間もいなくて、そこそこに引き上げたのが、最後になってしまった。もっともっと、聞いておきたいことがいっぱいあったのに、それらはみんな持ったまま寿岳さんは遠い遠いところへ行ってしまった。どう追いかければいいのかわからなくて、全く、途方に暮れている。

２．女学生の寿岳さん

ここで、わたしは寿岳さんの評伝を書くつもりはない。しかし、『日本語と女』を書いた人物として、京都で憲法を守る会を主宰した人物として寿岳さんを語るときに、やはりざっと、その生い立ちを見ておく必要があるように思う。なぜ、そのようなことを考えたのかという思考方法や、どうしてそういう運動をせざるを得なかったかという突き動かされるような力は、成人してから急に芽生えたり発心したりするものとは限らないからである。

以下の文章をわたしはできるだけ、寿岳さんに語り述べてもらおうと思う。

２．１　教育・環境

寿岳さんは1924年、英文学者で民芸運動の推進者だった父・寿岳文章と、翻訳家・随筆家で和紙の研究家でもあった母・しづの長女として生まれた。両親の教育に関して寿岳さんは次のように語っている。

> 教育に関しては本当に感謝しています。「こうしなければならない」という押し付けがましいところは一言もありませんでした。〔……〕私は小さい時から勉強が大好きでしたから、ものもたくさん読んだし、両親はそういう性格を育てるようにやってくれたと改めて感じます。「勉強したかったらなんぼでもしたらええ」と言われても、「女だから」と言われたことはない。（「母を語る５　母と父―育てあい、磨きあった人生」1997b, p. 106）

両親は民芸の研究や、和紙の調査に全国を旅行して家を空けるときも多かった。そういうとき、寿岳さんは病弱な弟を守り、女中や、留守を助けてくれる親戚の人たちの、家事を手伝い、学校の準備をしながら、両親の帰りを待った。読書欲も盛んであった。

私は、わりと左翼的な小説を読んでいるんです。家にあった『山本有三全集』が〔……〕とても気に入り何べん読んだかわかりません。〔……〕それから「円本」というのがありました。定価が一冊一円なのでそう呼ばれているのですが、私のところには春陽堂文庫の『明治・大正文学全集』が全部揃っていたんです。それを小学校の時から女学校にかけて読んだのが私には後々大へん役に立ちました。(『「女・子供」の目』1997a, p. 27』)

と言っているように、小学生のころから旺盛な読書家だった。

この読書については、別のところでも語っている。

女学校時代の日記をみると、かなり本を読んでいますね。私はこれほど今、本を読んでいるかなと思うと恥ずかしくなるぐらい、よく読んでいました。〔……〕『明治・大正文学全集』というのが家にあって、それを気に入ったのを何遍も読み直しました。女学生の頃に、それを読んでいたことが、後々私の教養の一部を作ったなと思うんです。やっぱり乱読の時代というのはとても必要で、大切だなと思います。自分でちゃんといろんなものを読むと、反軍思想、そして反戦思想というのは、何となく自らできたんです。だから何も私が優れていたわけでもない、環境がよかったんだと思います。(「ことばと女の歴史」1996b, p. 2)

両親は忙しいなかにも、子どもに最新の洋画を見せるために一緒に出かけ、休日には近郊の山をハイキングし、夜は子どもの話を真剣に聴き、子どもと共に過ごす時間を多くすることに努めた。寿岳さんは、明るく健康で元気な、そして好奇心が旺盛で勉強が好きな自立心の強い少女として育った。

2．2 『過ぎたれど去らぬ日々』

寿岳さんは1981年に、女学校時代の日記を抜粋して『過ぎたれど去らぬ日々わが少女期の日記抄』という本を出している。

少女期の自己を開示することにはためらいながら、友人たちの勧めがあったことと、戦後35年を経て起こった憲法改悪の動きに抗議して、軍国主義盛

んな時期の１少女の、せつせつたる、反戦の思いを、改めて世に知らしめようという意図をもって公開に踏み切ったものであった。

そこには、女学生時代の寿岳さんが等身大で描かれている。「その女学校では、クラス担任に、一週に日記を提出することを義務づけていた」(p. 227)ために、いわば担任に見せるための日記を書いていた。戦争の始まった時代の女学校の１年生から５年生まで、1936年４月から1941年３月の間の、なにごとにも真剣に立ち向かう少女像が描かれる。そこには反戦と平和志向の文章が多く見られる。寿岳さん自身、

> 私は当時としては考えられないかなり過激な内容を書いていた。とりわけ、日本が中国に対して起していた戦争がいかに非道なものかを書き、ヒットラーなんか大嫌いと書き、平和ほど尊いものはないとはっきり書きつづっていた。そういう内容に対して、五年間担任の先生方は誰一人注意や警告を発せられなかった。これは大したことである。当時の治安当局が知ったら、と今ゾッとしている。(『想父記―呼び交わす声』1993, p. 142)

と述べているように、当時このようなことを学校提出用日記に書いてよかったのかと不思議に思うほどだ。

２．３　ヒットラーよもうよい加減に止めて呉れ

たとえば、２年生（1937年）の７月29日の日記には、こう書かれている。

> 学校につくと、まだ授業中らしく、何だかものがなしいような、あの“此所はおくにを何百里”のメロディが雨の空に流れていた。日露戦争に従軍した小使さんが、あんなのを聞くとわしゃ情なうなる、と言った。ほんとうにそうだ。一度戦争をしたことのある人なら、それが尚さらひしひしと身にこたえるだろう。半時間程待っていると、千人針をさせられた。厭なものだ。〔……〕あんなに汗水たらして苦心してつくるなら、その労力を、もっと他の方面に向けたらよいのだ。〔……〕そのまごころを生産方面とか、戦争を防止する方面とか、そういうことに使ったらよいのに、どうして皆もそう思わないのかしら、戦争で血迷っているのか

な？（p. 51-52）

8月31日のはこうだ。

今日は四人出征なさる。〔……〕挨拶は二人やられた。一人の人がこういわれた、戦争は　ぜひ勝たねばなりません！敗戦のみじめさを味わいたくありません！と。

だが、何故、何故一歩進んで戦争をやめるということを考えないのだろう。戦争に勝つ、そんなちっぽけな喜びよりも戦争というものをなくした方が、どんなにどんなに嬉しいかしれないのに。

自国が勝つ、そして敗戦のみじめさを味わわずに、わっしょわっしょとお祭り騒ぎをやる、併し、其の一方には必ず敗戦国があるではないか！（p. 59-60）

金子みすゞの詩を思わせる発想である。

4年生の9月8日は、地理の時間に教師から聞いた話に対する感想を述べる。

ヒットラーよ、もうよい加減に止めて呉れ、それだけとったらよいだろうに。全体主義者、独裁家、ひょっとしたら此の大戦は彼の浮沈の境かも知れない。国内にはまだまだ反対思想の人もあるという。〔……〕時間が余ったので交戦国、中立国の色分けをした。私達はこんなにのんきにここ中立かいなーといっているが、今私が色を塗っている所には砲車がきしり、放火は大空にきらめき、兵士達の靴は駈け回っている。今ポーランドの人はどうしているだろうか。ドイツの人々は。（p. 157）

世界にも目を広げ、しかも、地図上の戦争から、ポーランドやドイツの人々へ思いを寄せるところが、人間を学問対象とする寿岳さんの後年の研究方法を示唆しているではないか。

2．4　外来語禁止・英語排斥に冷ややか

ことばについても、何箇所かで書いていて、当時の外来語使用禁止の動きを冷ややかにみている。2年生の10月6日の日記である。

お話はつい先だってまで流行していた外来語の罰金制度、支那事変に対しての冷静なる批判といったようなものについての色々面白いお話で

あった。

外来語一銭罰金は三日間続いた。二日目に、私がモーニングといったら一銭とやられた。私は毛頭そんなものに入る意思はない。断ろうと思ったが、何しろ相手はシャボテンの心臓の面々、言っても無駄だと思って、苦笑して出した。つもりつもって其の日はとうとう十四銭も出してしまった。ほんとになんてつまらぬことをするのだろう。(p. 64-65)

外来語を使わないようにという教育が、かなり徹底していたようである。一銭罰金の制度を採った女学校があった事実がわかる。しかも、それには寿岳さんは乗らない。英語排斥にも批判的である。４年生の８月６日である。

べんきょう、イングリッシュソングの所。此んなの今ごろしたら、反英の折から少々へんのよう。〔……〕英語をやめろなんてよく書いてあるが、私は反対だ。知るのだから。溺れるのではないから。(p. 148)

２．５　女性は女性らしく従うばかりが能じゃない

女性の生き方についての発言も多い。２年生も終わりの４月４日の日記である。

今日は婦人運動の先駆者、メリー・ウォルストンクラフトの生涯と思想という本を読んだ。私は今までどんな人か知らなかったが、偉い人だと思って感心した。まるで女性の世界がまっくらであった其の頃、あらゆる苦難と戦って、全世界の女性の為に叫んだその偉大さは、本当になんといってよいかわからない。

今日では大分女性の地位が向上してきたといえるだろう。だが尚男性に対しては単に一個の奴隷に過ぎぬひとが沢山なのだ。女性の徳は、男性の単なる功利に基礎を置くが故に、自ら彼等の従属的地位に適するものである。女性の徳は消極的の徳である。〔……〕精神的の独立がなければならぬ。意気地のない妻は愚なる母である。もっともっと今の女の人は知的に目覚めねばならぬと思う。それに学校にいる間は相当に勉強するのに、家庭に入るや否や、折角の勉強がどんどん後戻りしてただ家庭の仕事にあくせくするようになるのは、何がそう然らしむか。本当にこ

の本は面白かった。(p. 91-92)

寿岳さん自身、後にこの日記抄を編集しながら、「強烈！」とコメントをつけているほど、14歳の少女の日記としては、迫力があり、圧倒される。寿岳さんの思考の原点はすでに14歳にして、完成していたのではないかと思わせるほどの成熟ぶりをみせている。３年生の５月31日の日記も同様である。

日本では自分に対する目だとか、又社会に対する考えだとか、女性の地位等に対する考えが少しもなくて、ただ良妻賢母の型にはめこまれ、ボンヤリと一生を送るようになりやすいと思う。女というものが一体何であるのか、ということを考えずに、よい妻になれ、よい母になれ，良人に従え、などといっても何もならない。先ず立派な女性とならなくては。もう少し日本の女の人は自覚しなくてはならない。従うばかりが能じゃない。(p. 100)

後半の快調な文体は、そのままで、大人になって書いた寿岳さんの文章を髣髴とさせるものがある。次は４年生になった４月14日の日記である。

何だかしら、先生のおっしゃったことが、深いことを避けていらっしゃる（変な言い方だけど）ようで、ぐいぐいつっこんで行きたい気がしてならなかった。日本の女の人って、家事だけが生命なんですか。先生は学校を出たら、英語や数学なんか一年位で忘れてしまうけれども、家事は女の人に一生かかる勉強で風におっしゃったけれど、そんな考え方が、日本の女の人について因習的な、女は女、というような考えを男の人に抱かした原因の一つではないかしら。女性は女性らしく、そしてつつましやかに貞淑であれ、勿論それをどうこういうのではさらさらない。つまり今の女の人はあまりにも自分を所謂「女」としすぎてしまうのだ。〔……〕私は大きくなっても、御掃除や、お洗濯や、御飯拵えや、そんなことばかりにあくせくとなるような人にはならない。〔……〕ただそれは女性の全生命をそんなことばかりに打ち込んではいけないことなのだ。人間として自分を見つめなければならない。(p. 141)

すでに「女らしさ」への疑問がここに生まれていて、寿岳さんはそいう枠に入った生き方をする人にはならないと、早くも言い切っている。

4月24日はさらに激しくなる。

第一に悪いのは女の人自身である。罪は先ず女性にある。どうして今の状態で女の人は満足しているのだろうか。めざめるべきである。「女だから」、そういった考えをなくしてしまわねばならぬ。男の人に馬鹿にされるなんて！！私は今までの女で決して決して居たくない。むやみに従ってばかり居られない。正しく、つよく生きねばならない。

一心に勉強しよう！自分のためにするのではないのだ。女の人のために！けれど結局はすべての人〔……〕世界の人のために。私は生きる。しっかりと、明るく、高い理想をもって。(p. 142)

日本の女性の生き方を改善しなければいけない、そのために勉強するのだという。そして、結局は世界の人のために生きる、と視野は世界に広がっている。

激しく批判したり、疑問をぶつけたりしているところばかりではない。学校の成績を気にする点取り虫でもあった。1年生の12月4日である。

ああ口惜しい。ほんとにどうしようかしら。ああじれったい。思っても思っても涙が出てくる。英語の単語を間違えてしまった。悲しい心持で家に帰る。できるだけゆっくり歩いて心を鎮めようとしたが、いよいよ家が次の角に見えてくると、今日の試験の出来栄えを心配しているであろう母の姿が思い浮べられて、足が進まなくなる。(p. 27)

など。また、終業式の通知票を見て一喜一憂するする場面もよく出てくる。すなおで、従順な一面もある。3年生の12月24日の終業式の日の最初の部分である。

八時半から終業式があった。校長先生の御訓話があり、今年を振りかえったお話をなすった。体育、智育、徳育、三方面にわたって皆それぞれ順調に行ったとおっしゃった。よかったと思った。来年はいっそうしっかりやって、お互いに励みたい。(p. 121)

将来の進路について、5年生の1月29日には次のように書いている。

このごろ先生方に、あんたどこへゆくのと聞かれるのでいやになってしまう。そして女専なんて考えたくないような気がする。私はもう勉強

するのだということを念頭において、学校のことなんか思わずにおこう。実際考えるのいやだから。三高みたいなところがあるとよいのに。つまらない、つまらない。(p. 207)

当時の教育制度では、女性は男子と同じ教育は受けられなかった。まず最初にぶつかった差別の大きな壁に嘆いているのである。

3．女性差別のある教育制度を憤る

こうして、日記の時代を終えた寿岳さんは、彼女としては、当然のこととして、女子専門学校へ進み、大学に進む。大学は、当時女性の入学を許可したわずか２校しかなかったうちの東北帝国大学へと進んだ。ひざもとの三高、京都帝大に進めないのがなんとも口惜しかった。

後になって、自分の生きてきた道を振り返るとき、こうした教育の女性差別について、寿岳さんはいたるところで、その怒りをぶちまけている。

私の若い頃は15年戦争のさなか、社会のありかたとしては、きわめて悪い時代だった。〔……〕私自身が非常に腹立たしく思っていたことは、男と女の生き方に関することだった。〔……〕女の勉強の道がひどく片より細いことであた。男が入学して自由に勉強できる大学にほとんど女が入れないことであった。学力が不足というのではない、それ以前に、女なるがゆえに入学を拒否されるのだ。旧制帝国大学では、私にもっとも近い場所にある京大、あるいは日本の中心の東大は、完全に女の入学について考慮するところがなかった。

しかし、まことに幸いなことに、1913年(大正２）年、つまり私が生まれる11年前に東北帝大が文部省ににらまれながらも女性に門戸を開放していた。私は幼い頃からそのことを知っていたので、東北大に入るべくかなりの努力を重ねていた。(『新学問のススメ１　人間を考える』1987a, p. 3-4)

4．抄物研究

東北帝大では国語学の小林好日教授のもとで中世の抄物を専門テーマとする。そのいきさつについては、後に次のように語っている。

> 小学校しか出ていない母は、高学歴の父に、九割九分は討論で勝っていました。そんな母に、私は小さい時から「あんたは大学へ行きや」と言われていたので、当たり前のように大学へ行きました。当時女学校や専門学校の級友でも、大学に行った人は一人しかいませんでした（その人は台湾の基隆にいて、台北帝大に入りました）。あのころ女性が入ることができたのは、東北帝大、九州帝大、そして、植民地であった台北帝大だけでした。私は土居光知先生がいらっしゃること、学位のない先生ばかりでそれをよしとする独特のムードがあると父がよく話してくれたことなどから、迷わず東北帝大にすすみました。
>
> 〔……〕私が史記抄をやってみようという気になったのは、東北帝大の小林好日先生のおかげです。小林先生の論文集『国語学の諸問題』（岩波書店、1941年）には、「の」と「が」について、どういう意味で使い分けているのかわからないと書かれていた論文があり、私はそれを研究しようと思ったのです。全然手がつけられていない研究分野でしたが、卒論で誰もしないことをしようと思っていた私は興味をもったのです。（「私のこと」2001a, p. 9-11）

抄物というのは、室町時代から江戸にかけて、漢籍の漢文・漢詩を僧侶や学者が講釈して、弟子たちに教えたのを弟子たちが記録したもので、中世の話し言葉資料として欠かせないジャンルの資料群である。その抄物を寿岳さんは、語彙、文体、文章構造、表現などの面から研究していった。その集大成が1983年の『室町時代語の表現』である。

そこには次のような論文が収められている。

第Ⅰ部

- ①「タノシ」の一時期
- ②抄物の文選読

・③室町時代の「の・が」―その感情価値表現を中心に―

・④抄物の文構造

・⑤抄物の会話文

・⑥史記抄の文章

・⑦埒外の文体

⑧言語観察の対象としての抄物の一意義―擬声語と翻訳―

第Ⅱ部

・⑨抄物語彙研究の意義と方法

・⑩抄物基本語彙

・⑪語彙と文体

・⑫擬声語の変化

・⑬抄物における擬声語の使用率

・⑭接頭辞「こ」のもつ問題

・⑮形容詞の語彙的変遷―中古から中世へ―

・⑯抄物の擬声・擬態語彙

・⑰付録　中世言語資料―基礎語彙表

（注：①－⑰の番号は後の引用のために遠藤がつけた）

これらの論文に共通するのは、抄物の語句や文章の形態や文法構造を、表現者を意識しながら、抄物を語った人物―抄者と寿岳さんは言う―の人間の声として、捉えようとしている点である。

最初の論文である③で、寿岳さんは「昭和21年の卒業論文に於て、私は室町時代の「の・が」両助詞の感情価値からの考察をした。」という。寿岳さんは史記抄を使いながら、

蚕ノ葉ヲ食フヤウニ

蚕ガ桑ノ葉ヲ食フ様ニ　（下線は遠藤）

のような例を渉猟しながら、感情的な価値の相違として、「の」の待遇が、「が」の待遇より高く、そこに尊卑の差があるとしている。

この論文集の中で使われることばにも注目したい。

例えば抄物の数多い識語の中には色々面白いものがあるが、そこには僧侶なりの、極めて現実的な生活の匂いが感じられるものもある。更に、当時の禅僧たちがある意味では世俗的であり、時代の先端をゆくインテリであり、時としては現実を牛耳る権力者でさえあった傾向を思う時、彼等もれっきとした室町時代そのものの生活人であり、従って如何に講義であっても、その背後には豊富な室町時代の日常語の世界があるように思われる。(⑤ p. 69-70)

「従って如何に講義であっても、その背後には豊富な室町時代の日常語の世界があるように思われる」のような所謂論文調のものもあるが、それよりも「色々面白いものがあるが」「生活の匂いが感じられる」「先端を行くインテリ」「彼等もれっきとした室町時代そのものの生活人であり」など、当時の論文には見られなかったであろう日常生活で使われる語句や文章が多用される。寿岳さんは研究者生活の初めから、研究の世界と日常生活とを同じ次元で捉えていたのである。

また、

『史記抄』が所有している膨大な和文の質と量を知っている時、私たちは何故桃源がこんな漢文を書いたのかといぶかしく思う。あののびやかな、どこかユーモラスで至れり尽くせりの感ある和文でなぜことがらを述べなかったのであろうか。何故窮屈な論文で論陣をはり、思いを述べるのであろうか。(⑥ p. 97)

と疑問を述べる。ここでも、「のびやかな」「至れりつくせり」「窮屈な」など日常語を使う。そして、こうした疑問を解くために、数字や図式を使って、量的、質的に検討している。抄物研究の意義については寿岳さんは次のように述べる。「従来の研究は書誌学的文法方面が多く、語彙論の立場から抄物を観察することは厳密には皆無であった」と述べ、

抄物の語彙を作ることは、とりわけ国語史的な視点からどのような価値があるのか。抄物語彙の編成は、単に今まで開拓されていない資料だからとか、中世語の重要資料であるとかの漠然たる観点からのみ重要な

のではない。抄物でなくては得られぬ特有の性格が、とりもなおさず抄物語彙研究の価値となる。その性格の一つが抄物言語の実用性である。明治以前の国語資料で、これまでに語彙索引が作られたり、語彙について述べられたりしたものは、その殆どが文学作品及びそれに準ずるものと言ってよい。(⑨ p. 147)

と、文学作品偏向の従来の研究方法を批判し、抄物を語彙研究の対象とすることの意義を述べている。

この著作を評して、出雲朝子（1984）は、

著者の方法は、抄物の文章を書き手の血の通った表現としてとらえるものであり、特に②の「亜文選読」の部分などは、抄物の文章のいかにも中世らしい特徴を見事に明らかにしている。(p. 70)

⑫は、擬声語について、現代語と中世語とに例をとり、その認識、新語の創造、音象徴性の問題などを広く多面的に考察したもので、著者の表現への関心が対象と合致した卓論である。(p. 71)

と高く評価したうえで

本書は「表現」への関心によって全体が貫かれており、著者の思考力の幅の広さが特に印象づけられる個性的な研究書である。

としめくくっている。また、宮島達夫（1984）は、

(著者があとがきで、大体私が「表現」にかかずらっていることが明らかである、と述べているのを引きながら)

表現にかかずらうということは、言語資料を単にその時代の言語を明らかにするための材料としてみるのではなく、そこにつねに表現する主体を考える、ということになる。〔……〕表現を問題にするには、論理的な分析力も必要だが、まず、するどい語感が要求される。この点、著者の説明にはなるほどとおもうことが、すくなくない。(p. 89)

と、鋭い語感による説明を評価している。

京都府立大学を退職するとき、寿岳さんは所蔵の抄物９点の影印版として『向日庵抄物集上下』を刊行している。その本の「はしがき」で、寿岳さんは、以下のように述べる。

1945年(注)、きしりをたてて日本が急転換した９月、東北帝国大学を卒業した私の卒業論文は中世語に関するものであったから、当然その糸をひいて研究はそちら方面のことが多かったが、気の多い私は、方法論的な興味もあって、よそ見をせずにはおれず、言ってみれば言語生活史風のあれこれのことも学生たちといっしょにかなりてがけた。

がいつも帰るべきふるさとのように、心は中世の、抄物の世界を私は忘れることができなかった。きわめて扱いのむずかしい資料で、手も足も出ないと嘆きつつも、縁あって結びついた抄物はそれだけによけいに私には大切な存在であった。（ｉ）

（注）大学入学が1943年で、３年で卒業したのであるからこの年では合わない。また、のちに「私のこと」で寿岳さん自身の書いた略歴では1946年卒業となっている。

抄物は寿岳さんの帰るべきふるさとだったのだ。寿岳さんと京都府立大学国文学研究室の同僚であり、寿岳さんの退職の年に抄物研究会を始めた木田章義教授は同書に「向日庵抄物逍遥」と題する文章を寄せている。そこで木田教授は、

寿岳氏は常に言葉そのものよりも、その言葉を話していた人間に興味があったようである。そしておそらく氏はそれらの言葉の背後に確かに、その言葉を使った人々の息遣いを感じている、と私は感じている。これは単なる文学的修辞ではない。なぜなら、氏が論文の中で取ったさまざまな試みをみると、自分が確かに感じているものを、どうにかして、数字や目に見える形で示そうとされていることが明らかに感じ取られるのである。(p. 557-558)

と、独自の方法論で、表現の解釈を結びつけようとした寿岳さんの研究を高く評価している。

しかし、寿岳さんはこうした国語研究に疑問を持ったこともあった。

私は専攻を国語学とし，以来、私はその方面の研究者として歩んできている。しかし、その道程はまっすぐに単純であったとはいえない。ひところ私は国語学専攻であることに非常に不満を抱いていた。何しろ、

大学入学に際しては、極端に言えば、女としてとてもしんどいことに挑戦するのだ、専攻を何にするかは二の次、とにかく東北帝大にはいらなくては—そういう気持ちばかりだったのだ。歴史とか文化人類学とか、とにかくもっと人間にかかわりのある学問のほうがよかったかな、言語をやるというのは何かまだるこしいところがある、そういう気持ちを拭いきれなかった。

そういう一種の迷いを持ってから長い歳月。私は今、ふたたび言語学、あるいは国語学を専攻する喜びを十分に持っている。ことば、これはいろいろな世界に出入りできることも有効なパスポートなのだ。私は今、みずからの信念として、ことばの学問の面白さを思っている。(『新学問のススメ１　人間を考える』1987a, p. 4)

こうみてくると、抄物が学者寿岳さんのその他の研究、その後展開される現代の女性のことばに対する多くの精力的な活動とが、切れているのではなく、同じ線上で、裏と表の関係で平行してあったことがわかってくる。そして、時として、寿岳さんの論文に感じる違和感がどこから来ているかが解明される。違和感とは、硬い論文の中にふと、肩透かしをされたように感じる軽さであり、肩を怒らせていたかと思うと、すっと腰を引くような緩急自在の柔軟さの混じった文体の相違から来るものである。

従来の国語学で書誌学や、語彙論・文法論を論じたものの多くは、淡々と謙虚な筆勢で事実を伝えるに終始していたと思う。論文に筆者の主観や願望などをことばとして表明されることはほとんどなかった。筆者の意見や主観を述べることは、論文の客観性を低めるものとして避けられてきたと思う。

寿岳さんの論文は、豊富な文献資料に基づいて、事実を伝えながら、併せて、寿岳さんの、人間の表現としての抄物を知りたいという、強い願望がほとばしり出てきている。そのことが、一般の論文調の論文には使われない、表情豊かな日常語を取り入れる結果になっている。

また、テーマの設定も従来の国語学の対象とするものとは異なるものが多い。

寿岳さんも述べているが、

「おまえ」「主人」という言い方について、一度も国語学会で研究発表されたことはないけれども、一丁やってみようかというところで、20年ほど昔に研究発表しました。しかしなんでこんなものが国語学会の発表なんだって顔は皆していましたね。その後『国語学』に書くようにも言ってきませんでした。(「『日本語と女』から15年」1994c, p. 4)

日常生活とはほど遠い言語の諸相をテーマとし、どこからつつかれても壊れない堅固な城を築くかのように身構えて書かれた論文群の中では、寿岳さんの論文は異質なものかもしれなかった。また、それは、40年前ではおそらく異端視されて、正当な評価が受けにくかったはずである。いや、今日でも、論文には事実を語らせればいいのであって、主観を述べてはいけないと考える人はまだ多い。研究のための研究であるべきではない、研究は、生きている人間のために、その生きた人間がするのだという、多くの研究世界での常識が、日本ではまだ常識になっていない。寿岳さんは、そうした日本の学問世界にも風穴を開けようとして闘った。

寿岳さんが女性研究者として、先駆的であったのは、論文の書き方だけではない。研究者のパフォーマンスの面でも同じことが言えた。「女らしくない、女離れしている」と言われることについて寿岳さんは語っている。

言いにくいことをパーンと言ってみるとか、それから真っ先に質問するようなときによく言われますね。〔……〕大学院で、これは京大にお世話になったのですが、何でも私が先に意見を言うと、眉まではひそめられませんけれども、「寿岳さんはその点ものすごく変わっている、ふつう女の人というのは二、三人男の人が質問してからやおら恥ずかしそうに、あのう私も一つ……という感じで言うと愛されるんだよ」と、こういうことをいわれるわけですね。(「女らしさと日本語」1982a, p. 219)

と、女性はしとやかであるべきで、男性より先にものを言ってはいけないという、タブーに果敢に挑戦していったのである。

京都府立大学時代の寿岳さんは、こうした抄物研究と言語生活史方面の研究を併行して続けることになる。

言語生活史を研究テーマとすると、当然ながら、寿岳さんが女学生時代から決然と立ち向かっていた女性の地位の向上や、不平等解消の問題につながってくる。

女性の名前の明治期から現代までの変化を捉えて、女性の生き方の違いと結びつけた名前の研究は、『女は生きる—名前が語る女の歴史』『日本人の名前』となって発表された。表現面では『レトリック—日本人の表現』となる。同僚の樺島忠夫氏と共著で『日本の文章資料』も出している。これは古代の祝詞から明治の尾崎紅葉の『金色夜叉』までの多くの文章の中から優れたいくつかの部分を抜き出してテキストにしたものである。昨今、古今の名文を集めた本がもてはやされているが、その走りのような本である。その文章の選び方には、寿岳さんらしい選択眼が働いている。源氏物語、枕草子など定番のほかに、「史記抄」「永正本六物図抄」と抄物を選び、狂言では妻が夫を言い負かす「岡太夫」を選び、戦国時代の女性の落城の見聞録である「おあん物語」を載せている。

一方で寿岳さんは

> 口が達者だったので、大学卒業後間もなく講演を始めていました。私の話を聴いた京都府丹波の生活改善普及員の田中友子さんという女性が、地域の農村の女性の集まりに呼んでくれました。私は先生づらをせず、ともに学び合うことの大事さを教わりました。また、農村の女性たちも私と一緒に勉強するうちに、舅・姑・夫からの理不尽な抑圧や束縛に忍従することをやめ、「かなんことはかなんと言おう」と、自分の言葉を持つようになり、立派に成長していきました。(「私のこと」2001a, p. 11)

と述べるように、丹波の農村通いを始め、農村の女性たちと学びあうことになる。

5.『日本語と女』

岩波新書で1979年に出た『日本語と女』は日本語の中の女性のことばと、女性の生き方とを結びつけて書かれた最初の本であった。それまでに、日本語の中の女性のことばについて書かれた本はいくつかあったが、それらは真

下三郎『婦人語の研究』国田百合子『女房詞の研究』のような、女性の言語の中の限られた特殊な部分を研究者が外から眺めたもので、一般の日本の女性の、日常のことばを、当事者である女性が自分の実感に基づいて研究対象とするものではなかった。寿岳さん自身、この本は高く位置づけている。

> 考えてみますと、私エポックメーキングなんて偉そうなことは申しませんけれども、やはり口火を切らせていただいたということは自認致します。(「『日本語と女』から15年」1994c, p. 4-5)

この本の内容は以下のとおりである。

I　女らしさとことば

第１章　女らしさについて

第２章　日本語における女らしさの構造

第３章　日本語と女らしさ

II　日本語と女の暮らしのかかわり

第１章　うたの中の女

第２章　はみで女

第３章　ある農村婦人グループのたたかい

第４章　夫婦げんかの世界

寿岳さんは、まさに、自分の生活と実感から獲得した日本語の中の女を語った。前半はことばから見た女性であり、後半は女の暮らしから見たことばという構成になっている。

前半では、目次でもわかるように、執拗なまでに「女らしさ」と日本語の関係と、「女らしさ」と日本の女とのかかわりを追求していく。

前半の第１章では、「女らしくない」と女が言われることによる規制力は、男が「男らしくない」と言われたときとは比べ物にならないほど強く、「女らしさ」のレッテル効果が大きいという。

第２章は、「ことばの作る女らしさの基本条件」「自然な女らしさ？」「女らしいことばの三本柱 女向け」「ある場面での女らしさ」と節を分けて語って

いく。「女らしさ」が男の思い込みから創造されるものだとして、寿岳さんは苦い思いをこめて経験を語る。

寿岳さんが大学を卒業して研究者として進むことを決めて、ある学者を訪ねたそうだ。そのとき、その学者がやっている索引作りを手伝うことが話題になった。その時、「これでしたら女の方にでもできます」と言われたというのである。

さらに問題は、そうした思い込みに女性も慣らされて、女性自身でも、真実だと思い込まされていることだという。

第３章では、「個性と女らしさ」「消えた女らしさ」など「女らしくない」と言われて、いかに女性が束縛され不本意な生き方をさせられてきたかを、角度を変え、対象を変えて語っている。また、男性・女性作家の文章を文体の特徴を割り出す数式にあてはめて、書き言葉に「女らしさ」があるかどうかを論じる。その結果は、差はない、つまり、書き言葉には「女らしさ」はないというのである。

今から26年前に「女らしさ」というレッテルが女性の解放にとっていかに妨げとなっていたかを寿岳さんは説いた。その26年後の今、自民党を初めとするジェンダーバッシングの嵐の中で「女の子は女らしく」「男の子は男らしく」が改めて教育の場で目標とされている。寿岳さんはジェンダーを意識して、「女らしさ」の呪縛を解くことを主張したのではなかった。26年前はまだジェンダーという概念は日本の社会に入ってきてはいなかった。しかし、寿岳さんは早くも、ジェンダーの視点からその本質を見据えていたのである。

Ⅱの第３章がこの本のもう一方のピークをなしているが、ここではことばそのものというよりも、生き方のほうにウエートがかかっている。農村の女性たちがみずからのことばを獲得していくたたかいが、感動的に描かれる。つい、４、50年前まで日本の女たちが多かれ少なかれ呻吟した姿である。

この本で寿岳さんは、本当にごく当たり前のことを、平易に淡々と述べている。しかし、読み進めるうちに、日本語がいかに女性を束縛してきたかが身に沁みこんでくる。母親の世代、祖母の世代がいかに不合理に扱われてきたかが、よくわかるように書かれている。どんな時代も、どんなことばも、

歴史なしには存在しない。そのつい先ごろの歴史を知らないで、現実を正しく知ることはできない。近い過去を知るための絶好の本を書いてくれていたのだと、改めて思う。

この本が出た当時に、『婦人公論』に載った書評を紹介しておこう。十返千鶴子は、以下のように評価する。

> 国語学者として活発な研究活動をつづけている筆者が「女」であるという自身の立場から、古くから日本の生活の中に根づいていることばと女の生き方とのかかわりに目をむけ、今まで手つかずに残されたままになっていた、日本語と女性史との関連を堀りさげてみせた興味深い読みものである。ことばがその社会の思想、美意識、あるいは仕組みの特長などのさまざまな文化を反映する一方、そのことばが人間を拘束し、一定の型にはめこんでゆく場合を考えれば、日本のことばと女の歴史とのかかわりの深さはとうぜんといえるからである。(「婦人公論読書室『日本語と女』」p. 373-374)

この新書は地道に売れ続けて、版を重ねているのが寿岳さんの喜びの１つであった。

しかし、寿岳さんには不満があった。この本が社会から好評をもって迎えられたのに、国語学会では無視されたことだ。

> つい、この間国語学会は、50周年を迎えました。その学会で林四郎さんという方が国語学のが概括をなさったのです。それを多方面に分けておっしゃったけれども、私の名前は出てきますが、『日本語と女』が出てくるわけではないのです。国語学会はこの本を全く無視しております。(「『日本語と女』から15年」1994c, p. 5)

ところが、次の年に少し機嫌が治った。

> 『国語学会の50年史』というのが武蔵野から出て、それを最近見たら徳川宗賢さんが言語と女性との問題を提起してくれていました。国語学関係の人で『日本語と女』を取り上げてくれてのは徳川さんが初めてじゃないかと思ってほっとしたんです。(「女性語の50年史」1995f, p. 3)

女性のことばの研究方法についても、寿岳さんは語っている。

明治書院の『日本語学』で50年史を特集するらしいんですが、私には「女性語の50年」というのがあたりまして、私でよかったと思います。いわゆる国語学者だと、女言葉のイントネーションがどうなって、スピードがどうなってということしか書かないんですね。もちろんそれも一つの研究ですけど、そういうことだけが女性語の問題じゃない。(同上)

ここでも、いわゆる国語学者との研究方法や研究対象の違いを語っている。最初のお見舞いのところでも述べたが、2004年に、Oxford大学出版社からShigeko Okamoto と Janet S, Shibamoto Smith の編集で *Japanese Language, Gender, and Ideology* *CULTURAL MODELS AND REAL PEOPLE* という日本語をジェンダーの観点から捉えた本が出された。その中の Sumiyuki Yukawa とMasami Saito によるCultural Ideologies in Japanese Language and Gender Studies と題する論文は、1. 3節 Jugaku Akiko's focus on ideologies and subversive practices と題して寿岳さんのこの本の紹介で、節のすべてを費やしている。その書き出しは

> In Nihongo to onna 'The Japanese language and women', Jugaku single-handedly provided a comprehensive theoretical framework for the study of language and gender. (p. 26)

で始まり、寿岳さんが徒手空拳で挑んだこの本が、日本語とジェンダー研究の嚆矢であるととらえている。

昨今、特に欧米でジェンダー研究が盛んになっているときに、日本語をジェンダーから論ずるには、まずここから出発しなければならなくなるはずである。

『日本語と女』以後も寿岳さんは旺盛な講演活動、執筆活動を展開する。日本語関係では、『新しい敬語』「女性語にとっての昭和」「『女ことば』の重い意義」「女性語の五十年」「ことわざと女性史」など女性のことばに関する文章が次々発表されている。

6.「憲法を守る婦人の会議」と「答責会議」

これらの研究執筆活動と平行して、寿岳さんは「憲法を守る婦人の会議」と「答責会議」の代表を務めている。前者は1965年に宮内裕京都大学法学部教授、京都府職員組合書記長などが、「これからほんとうに憲法を守ってゆくには女性の力が必要だ、ほんとうに平和憲法が大切な存在だとしんから思うのはやはり女性だろう。今、護憲の運動をしているのは主として男性たちだが、女の人たちこそ、その考えを持ってもらいたい。」(『ひたすら憲法』1998a, p. 21) と、寿岳さんの母しづさんに女性を中心とした憲法の会を作ってもらいたいという来訪を受けて決まったものだった。そのとき、寿岳さんの「私は決意した。陰の仕事は私がやろう、そうして母に表に立ってもらおう」(同上) という決心のもとに発足したのであった。

毎月の学習会だけでなく、8月15日と12月8日には、戦争と平和を考える行事を毎年繰り返し行ってきた。96年に、中選挙区から小選挙区制度に選挙制度が変えられるときには、それ以前から、守る会として反対の声をあげていた。

『ひたすら憲法』に寿岳さんは次のように書いている。

> いきなり「九条を止めましょう」などとは、悪知恵の働く九条反対者は言ってこない。遠まわしにじりじりと、国民が九条安泰とのんきにしている間に魔手をのばしてくる。まず国会で各議院の総議員の三分の二以上の賛成で国会が、これを発議することが必要だから、国会の情勢を、九条改悪派で三分の二を占めるようにしなければいけない。しかし当時の国会情勢は、改悪派で三分の二なんて到底考えられない数字であった。
>
> で、改悪派はとんでもないことを思いつく。改悪派がたくさん当選するような選挙制度をつくろう。今の中選挙区制、一つの選挙区から二人は出られる、それを一人の小選挙区制にすることになれば、大かた自民党候補が当選して、三分の二以上の改悪派をやすやすと得られることになる……。(p. 37)

2005年9月、「改悪派がとんでもない」ことを思いついた結果を知ったわたしたちは、寿岳さんがいかに正しく先をみていたかに驚かされる。この文章

を読むと、７年前にすでに、今回の総選挙の結果を見抜いていたことを知らされる。その慧眼には頭を下げるほかはない。今の、まさに憲法が風前の灯になりかけているとき、寿岳さんがいたら、どんなに必死に叫び声をあげて、食いとどめようとするだろうか。それよりも、「あなたたちなにしてんの、あなたたちがボケボケしてるから、こんなことになってしまったんやないの」と叱られるのは必定だろう。

もう一つ、晩年の寿岳さんが力をそそいできたものに、答責会議がある。この会議は、日本が植民地支配をした韓国に対して、日本は責任を取っていない、それでいいのか、というところから出発している。

> 旧憲法によって日本は無答責である。で、それはおかしい、責任を持たなくちゃいけないんじゃないか。そういう思いをもつ方たちが集まって、韓国の同志と共にずっと話し合いを続けてきた。(「女性語の50年史」1995f, p. 3-4)

その会議は、韓国側と日本側の参加者のシンポジウムの形で行われた。会場を韓国と日本と交互に1991年から５年間、５回にわたって開かれた。こうして双方の立場や意見を交換してきた結果を『無答責と答責　戦後50年の日韓関係』にまとめて、刊行した。その編集を祖父江孝男氏とともにしたのが寿岳さんであった。

寿岳さんは、生涯、考え、動き続けて、周囲の人々に希望や怒りやユーモアを振りまきながら、元気に走り続けてきた。その巧みな話術と明るさで多くの人をひきつけてきた。その中身は、日記の女学生がそのまま大人になり、中年になり、高齢期を迎えたとしかいいようがない。生涯、真面目に真剣に考え実践してきた。

その行為は、女性の不平等を平等にするためであり、女性の学問のレベルを高めるためであった。そのための障害になるのが戦争であるから、戦争に反対する。再び戦争を起こさないためには憲法を守らなくてはいけない、そのためには率先して、その運動を主宰する。見事に言行が一致していたのである。

7．現代日本語研究会のメンバーとして

リベラリストの両親のもとに育つという、恵まれた環境が寿岳さんを生み、その環境を裏切らないまじめな寿岳さんはひたすら、世の不合理と闘い、理想を掲げてその実現に努めた。このようなスケールの大きい、しかも無邪気と言えるほど純粋に学問をし、運動をした晩年の寿岳さんを、現代日本語研究会のメンバーとして迎えることができたのは、本当に幸せであった。

1994年から2001年まで寿岳さんは、わたしたちと一緒に夏の蓼科でのワークショップに参加して、講話をし、研究発表にコメントをし、高原散策を共にし、若い留学生の悩みを聞き、励ました。

京都でお隣にお住まいの田中さんのお話では、このワークショップを寿岳さんはとても楽しみにしていたという。２泊３日の会なのだが、寿岳さんはいつも、数日前からホテルに泊まり、終わってからは、蓼科周辺の別荘で過ごすお友達の家を訪ねて数日滞在するというスケジュールを立てていた。京都を発つ前にホテルと、お友達の家に宅急便を出して、リゾート地で着るおしゃれな服装を十分に準備しての山行きだった。

この会のことを寿岳さんは千田夏光氏との対談で話している。

> 先日、長野県の蓼科に勉強会に行ってきました。その勉強会が、頑張って朝９時から夜の10時までやられて、すごいハードで絶対男ならやりませんよ。もうまじめでまじめで、私らもう少しだらしなくやろうやって言うんですけど。そこでやっていた中身がなかなかおもしろくて、若

い研究者だったけど、日本語の女性差別のシソーラスについての発表がありました。

そこで、私が教えられたのは、母語とか、母性豊かなとか、母なるボルガとかそういうふうに言うでしょ。それも差別だって言うんです。「なんで一」って思いました。中国から来た若い人もわからないと質問がありました。発表者によると、母はかくあるべしだという、そういう制限がすでに働いているということなんです。〔……〕母語と言ったって、子供が生まれる時には父も母もいるんだから、そういう言い方はおかしいという指摘まであって、なかなかシャープなものでした。

その中で大へん若い人たちも来てまして、大学1年生のような人、それから院生の若い人とか、そういう人の中に「私は差別なんて感じたことがない」っていう若い人も居たんですね。私、それが不思議で、自分は差別されないで戦後に育って、それもずっと後半に育っているんだから、そういう差別的な環境はずいぶん消えてそう感じるのはいいけど、でも女子学生の就職問題などでは我が身の問題なのだし、まして今大問題になっている慰安婦のことなど、女とは社会的歴史的にどういう存在だったのか考えずにはおれないでしょうと。(『「女・子供」の目』1997a, p. 53-54)

73歳の大先輩に、朝から夜遅くまでの発表や討論につきあわせたのは確かに申し訳なかったと思う。寿岳さんは、疲れると上手に居眠りをしていた。でも発表が終わるころには目を覚まして、核心をついた質問や意見を出していた。若い発表者もずいぶん励まされたはずだ。

ここでの寿岳さんの講演の題目は以下のとおりであった。

1994年　『日本語と女』から15年

1995年　女性語の50年史

1996年　ことばと女の歴史

1997年　女性観雑感

1998年　すべての根源としてのことば 暮らし

1999年　カキイロ考

2000年　「寿岳」について、そして変わりゆくことば

2001年　私のたどった道と憲法と

この時期になると、特に新しい研究というものではなく、今までに各地の講演や雑誌の対談などで話されたことが多かったと思うが、研究については、後輩である研究会のメンバーを前にしての、先輩からの心のこもった忠告や助言が多かった。同じことを何度聴いたにしても、寿岳さんの、人の心をつかんで離さない巧妙な話術にはその都度引き込まれたし、若い参加者たちは、間近に生きた歴史を見る思いで、感激しながら聞き入ったものだった。

中でも1994年から数年の、女性の言葉の研究の歴史や研究態度についての話は貴重だった。

> すてきな時代になりつつあるんだということ。女性と言葉に関するコメントがたくさん出てきているということは、すばらしいことだと思います。言葉は男が作ったものじゃないかと。男によって当たり前と思わされていることは、やっぱりそれに対して攻撃をしていかなければいけないなあと思うんです。おそらく国語学、言語学で、非常に狭い範囲のことしか今まで男性はやってきていないんじゃないかと。優れたものがいっぱいなのは認めますけど、それと、私どもがまた考えていかなければならないものと、両方必要なんだと、改めて思います。やっぱりどんな細かい作業をやっても、その非常にワイドで深い人生的視野をもつ研究がいいですね。それなりの志というものを大切にして、いわゆる悪い意味での職人にならないでくださいということをお願いして、終わります。失礼します。(「女性語の50年史」1995f, p. 5)

言語と女性の関わりの歴史を多く語った寿岳さんだが、

> 歴史というのは、変わらないようで、女の歴史と共に動く部分があるなあと思います。その意味では、ますます私たちは歴史を変えようではないか、というお話でございます。(「ことばと女の歴史」1996a, p. 6)

とも述べている。

2001年の８月５日には、自身が教育上で差別を受けて、東北帝大に進まざるを得なかったことと、戦後できた憲法を守る運動を始めたいきさつとその

会の活動などを話した後、

もちろん国語学者ですから、ことばに関することも頑張っておりますが、一方社会的なことも忘れることはできないんです。だから、何もかも一生懸命になってやっているという、そういう日々を送っております。好き放題に生きて、好き放題に人生のまとめをしつつあるように思います。これ、悪くないもんですよ。だから、みんなやっぱり、したいことをやるべきなんですね。思いきり、のびやかに、どんどんといろいろなことをやってもらいたいと思います。

みなさんもすばらしい仲間ですから、どうぞお元気で。私も元気ですけどもう77ですからね。みなさんは、うんと若くて張り切ってやってらっしゃるんだから、どうぞ、これからも行く末豊かな人生をお送りになりますように祈ります。おしまい。(「私のたどった道と憲法と」2001b, p. 5)

と、締めくくった。このときが、最後の参加になったのだが、見事に最期の挨拶になっているのには感嘆してしまう。このとき、外からは全く衰えも疲れもみえなくて、当然次回も参加されると思われたけれど、寿岳さんは何かを予感していたのだろうか。それで「人生のまとめ」と言い、「どうぞお元気で」という、別れのことばになったのだろうか。寿岳さん一流の軽い語り口で「おしまい」と最後につけたのであったかもしれないが、それまでは、上の「女性語の50年史」のときのように、最後は「(どうも) 失礼しました。」で終えられることが多かったのに、冗談めかしてであれ、この「おしまい」も、寿岳さんが何かを察してつけた結語であったように思えてならない。

こうした暖かい助言や激励のことばと、別れのことばを受け取ったわたしたちは、責任が重い。「のびやかに、どんどんといろんなことを」やることを託されている。「悪い意味で職人になら」ず、「それなりの志を」もち、「歴史を変え」られることを信じて進むことを求められている。

こうした寿岳さんの思いをどのように実現させていくか、寿岳さんがわたしたちに残した大きな遺産をどのように守り育てていくか、この課題を解くための模索と試行は、今すぐにも、始めなければならない。

引用文献

出雲朝子（1984）「書評　寿岳章子氏著『室町時代語の表現』」『国語と国文学』1984年８月号　至文堂 68-72

十返千鶴子(1980)「婦人公論読書室『日本語と女』」『婦人公論』1980年３月号　373-374

宮島達夫（1984）「書評　寿岳章子著『室町時代語の表現』」『国語学』139国語学会　武蔵野書院 89-93

Sumiyuki Yukawa & Masami Saito(2004) Cultural Ideologies in Japanese Language and Gender Stadies. Shigeko Okamoto & Janet S, Shibamoto Smith eds. *Japanese Language, Gender, and Ideology* CULTURAL MODELS AND REAL PEOPLE, Oxford University Press 26

寿岳章子さんの主な論文と著書

(1960)『現代のことば』三一書房(阪倉篤義・樺島忠夫と共著)

(1961)「抄物語彙研究の意義と方法」『国語学』45号４月　国語学会

(1962a)「地方新聞の表記の特性」『言語生活』133号９月　筑摩書房

(1962b)「抄物における擬声語の使用率」『計量国語学』22号12月　計量国語学会

(1963)「男性語と女性語」『国文学　解釈と教材の研究』8(2)号１月　学燈社

(1964)「女が書けば女らしくなるか」『言語生活』159号12月　筑摩書房

(1965a)『文体の科学』綜芸社（樺島忠夫と共著）

(1965b)「抄物の文構造」『季刊文学・語学』33号６月　全国大学国語国文学会編／日本古典文学会

(1965c)「まんがの文体」『言語生活』167号７月　筑摩書房

(1966a)『レトリック―日本人の表現』共文社

(1966b)「史記抄の文章」『国語国文』35号６月　京都大学文学部国語国文学研究室編／中央図書出版社

(1966c)「女性語と敬語」『国文学　解釈と教材の研究』11(8)号６月　学燈社

(1967a)『日本の文章資料』綜芸社（樺島忠夫と共編）

(1967b)「源氏物語基礎語彙の構成」『計量国語学』41号７月　計量国語学会

(1968a)『女は生きる―名前が語る女の歴史』三省堂

(1968b)「文体にみる女流文学」『国文学　解釈と教材の研究』13(5)号４月　学燈社

(1969)「くらしの中に憲法を持ちこむたたかい―ある京都の女性たちの記録」『月刊社会教育』13(5)号５月　国土社

(1970a)「ことば作法　その過去・現在・未来」『言語生活』８月　筑摩書房

(1970b)「語彙と文体」『季刊文学・語学』９月　全国大学国語国文学会編／日本古典文学会

(1971)「闘争とことば」『国文学　解釈と教材の研究』１月　学燈社

(1972a)「国立国語研究所資料「動詞・形容詞問題語用例集」をよんで」『国語学』90号　９月　国語学会

(1972b)「婦人の生活と権利」『部落』24(14)号12月　部落問題研究所出版部

(1972c)「平安時代物語中の和歌の条件―源氏物語・蜻蛉日記から」『計量国語学』63号　12月　計量国語学会

(1974a)「話しことば教育の建前と本音」『言語生活』269号２月　筑摩書房

(1974b)「埒外の文体―中世の文体の位置」『国語と国文学』51(4)号４月　東京大学国語国文学会編／至文堂

(1975a)「女性語50年」『言語生活』282号３月　筑摩書房

(1975b)「風雪の報告―婦人研究者シンポジウムに参加して」『日本の科学者』10(11)号11月　日本科学者会議編／日本科学者会議

(1978a)「女性語にとっての昭和」大石初太郎他編『ことばの昭和史』朝日新聞社 p. 88-124

(1978b)「いみことば考」『言語生活』318号３月　筑摩書房

(1978c)「人とことば：『おあん物語』の場合」『青須我波良』16号５月　帝塚山大学短期大学部

(1979a)『日本語の裏方』講談社

(1979b)『日本人の名前』大修館書店

(1979c)『日本語と女』岩波書店

(1979d)『暮らしの京ことば』朝日新聞社

(1980a)『暮らしのことばと心』大月書店

(1980b)「「かかわりを持つ」姿勢を」『日本の科学者』15(1)号１月　日本科学者会議

(1980c)「“女のことば”の歴史的背景」『月刊ことば』4(4)号４月　英潮社

(1980d)「翻訳と女をめぐることば—人称・敬語とかかわって」『文学』48(11)号11月　岩波書店

(1980e)「きまり文句」『言語生活』348号12月　筑摩書房

(1981a)『過ぎたれど去らぬ日々　わが少女期の日記抄』大月書店

(1981b)「ファシズムの一基盤としての女性蔑視—ある農村婦人史から」『思想の科学　第７次』２号５月　「思想の科学」編集委員会編／思想の科学社

(1982a)「女らしさと日本語」(『日本語と日本人』講談社　p. 214-265)

(1982b)「名前と人格」『言語生活』361号１月　筑摩書房

(1982c)「平和の構築」『世界』440号７月　岩波書店

(1982d)「女性語、この五十年」『短歌研究』39(10)号10月　短歌研究社

(1983a)『室町時代語の表現』清文堂

(1983b)『新しい敬語』(大石初太郎他共著　小学館　1983)

(1983c)「日本人のキイ・ワード「らしさ」」『国語学』133号６月　国語学会

(1983d)「日本語のキーワード」『日本語教育』50号６月　日本語教育学会

(1984a)『永遠の水汲むわが母』弥生書房

(1984b)『東北発信』大月書店

(1984c)「女は自由にしゃべっているか」『言語生活』387号３月　筑摩書房

(1984d)「差別とことばをめぐって」『部落』36(10)号９月　部落問題研究所出版部

(1984e)「皇国主義の言語体系」『思想の科学　第７次』54号11月　「思想の科学」編集委員会編／思想の科学社

(1984f)「洗い直し意味論」『ユリイカ』16(12)号11月　青土社

(1984g)「女の戦後史—86—G連—生活改善運動から土に根ざす「女の自立」へ」『朝日ジャーナル』26(49)号11/30　朝日新聞社

(1986a)『思いは深く』朝日新聞社

(1986b)「言うなの底に：女からの発言」『言語生活』420号　財団法人学会誌刊行センター

(1986c)「新言霊出現—ナカソネレトリックを衝く」『思想の科学　第７次』72号２月　「思想の科学」編集委員会編／思想の科学社

(1986d)「現在の啓発事業に思う」『部落』38(12)号11月　部落問題研究所出版部

(1987a)『新学問のススメ１　人間を考える』法律文化社（窪田幸男とともに編集代表）

(1987b)『向日庵抄物集上下』清文堂1987

(1988a)『京都　町なかの暮らし』草思社（絵　沢田重隆）

(1988b)『父と娘の歳月』人文書院

(1988c)『ことばづかいの昭和史』岩波書店

(1988d)「日本語の人称と妻と夫の間」『法学セミナー増刊　総合特集シリーズ』40号２月　日本評論社

(1988e)「配偶者の呼称」『歴史評論』457号５月　歴史科学協議会編／校倉書房

(1988f)「戦後における東京語の変遷」『国語と国文学』65(11)号11月　東京大学国語国文学会編／至文堂

(1988g)「差別と表現」『部落解放』286号12月　解放出版社

(1991)「ことばの研究と女性―若い人たちへ」『国文学解釈と鑑賞』56(7)号７月　至文堂

(1992)『京に暮らす喜び』草思社（絵　沢田重隆）

(1993)『想父記―呼び交わす声』人文書院

(1994a)『京の思い道』草思社（絵　沢田重隆）

(1994b)「『女ことば』の重い意義」『月刊日本語論』2-1 山本書店 52-57

(1994c)「『日本語と女』から15年」『ことば』15号 現代日本語研究会 3-7

(1995a)『湖北の光』草思社(絵　沢田重隆)

(1995b)『ひとりで暮らすということ』海竜社

(1995c)『無答責と答責　戦後50年の日韓関係』御茶ノ水書房（祖父江孝男と共編）

(1995d)「女性語の五十年」『日本語学』vol 14,No9 3月号 明治書院,26-33

(1995e)「ことわざと女性史」『女と男の時空 Ⅳ 爛熟する女と男―近世―』藤原書店 223-253

(1995f)「女性語の50年史」『ことば』16号 現代日本語研究会 1-5

(1996a)「ことばと女の歴史」『ことば』17号12月 現代日本語研究会 1-6

(1996b)「『毛詩抄』の完成を喜ぶ」『図書』565号７月　岩波書店

(1997a)『「女・子供」の目』ふきのとう書房　53－54（千田夏光と共著）

(1997b)「母を語る５　母と父―育てあい、磨きあった人生」『あごら』234号あごらMINI編集部　84-117)

(1997c)「女性観雑感」『ことば』18号 現代日本語研究会　1-4

(1998a)『ひたすら憲法』岩波書店

(1998b)『京都大好き』パル書店

(1998c)「すべての根源としてのことば 暮らし」『ことば』19号12月 現代日本語研究会 1-6

(1999a)「カキイロ考」『ことば』20号12月 現代日本語研究会 1-3

(1999b)「新春対談 女性の生き方と私の国語学」『歴史地理教育』589号1月 歴史教育者協議会（松島栄一共著）

(2000)「『寿岳』について、そして変わりゆくことば」『ことば』21号 現代日本語研究会 1-2

(2001a)「私のこと」遠藤織枝編『女とことば— 女は変わったか 日本語は変わったか』明石書店 p9-11

(2001b)「私のたどった道と憲法と」『ことば』22号 現代日本語研究会 1-5

付記：本稿で、わたしは寿岳さんについても、その他の人々についても、敬語はできるだけ控えている。あふれる敬意は抱きつつも、敬語をまとった文章が真意を伝えにくいもどかしさを感じるゆえである。

（えんどう おりえ）